

二〇一七年度「地域づくり」セミナー開催報告

市川 哲・榎木 美樹

コーディネーター…榎木美樹

▼第六回

「地域づくり」セミナー

地域資源と向きあうツアーリズム…
武將隊からやっとかめ文化祭まで

名古屋市職員

吉田祐治

ム…武將隊からやっとかめ文化祭
まで」

奥田晋一

「商店街拠点のご当地アイドルが
県公認アイドルになるまで」

コーディネーター…市川哲

第七回（二〇一七年十二月九日）

よそ者の所作―何をし、何を
してはいけないのか？グローバルな
視点で考える

名古屋市立大学滝子キャンパス
参加者約五十名

稲葉久之

「セネガルで考え、名古屋でやっ
てみたこと―触媒としてのよそ
者」

中村雄弥

「よそ者の「限界」、覚悟ある住
民として―アフリカ・福島経て信
州」

人間文化研究科の「地域づく
り」ユニットは立ち上げから三年
目を迎えた。今年度は教員スタッ
フ四名に、大学院生は七名、そし
て研究員として、地域社会でそれ
ぞれ活躍している稲葉久之さん、
菅原純子さん、名畑恵さんをお迎
えした。

また、「地域づくり」ユニット
の活動を掲載するウェブсай
ト(<http://www.region-ncuhum.com>)
だけでなく、あらたに「名
古屋市立大学人間文化研究科 地
域づくり」のFacebookページも
開設し、リアルタイムでのユニッ
ト教員の活動なども紹介している。

本ユニットの活動の軸である
「地域づくりセミナー」は、今年
度は新規教員スタッフである市川
哲、榎木美樹がそれぞれ第六回、
第七回のコーディネーターを担当
した。昨年度までは「大学の外に
出る」ことを趣旨として、セミナー
をさまざまな場所で開催してきた

が、今年度はむしろ「外部の方に
積極的に大学キャンパスに足を運
んでいただく」ことをめざし、名
市大滝子キャンパスにてセミナー
を開催した。その結果、参加人数
は昨年度よりさらに増加し、活発
な議論が交わされる充実したセミ
ナーとなった。

本稿では、その概要を紹介する。
なお、ウェブサイトには、セミナー
のチラシ・概要・参加印象記・参
加者からのコメントと回答のフォ
ローアップなどを掲載しているの
で、ご覧いただきたい。

第六回（二〇一七年七月一日）

「人」が演出する地域観光―観光
資源としての歴史・文化・ローカ
ルタレント

名古屋市立大学滝子キャンパス
参加者約五十名

吉田祐治

「地域資源と向きあうツアーリズ

ンド・イメージ調査」の結果についても、「いまさら何を」という感覚を持つ人が多いのではないかと述べた。

同時に、二〇一〇年の名古屋開府四〇〇年を契機に様々な変化があったことを紹介した。特に二〇一〇年に策定された「名古屋観光戦略ビジョン」には、当時名市大の教員であった山田明氏も参加しており、名古屋の魅力づくりやプロモーション、おもてなしといったことがテーマとなっていたが、ここで注目を浴びたのが名古屋の歴史であった。二〇〇八年ごろから名古屋でも歴史観光に力を入れるようになっており、吉田氏もこの時期、様々な経緯から古代から現代にいたる名古屋の歴史について勉強し始めた。このような取り組みを行う過程が、おもてなし武将隊の結成の助走期間となったとのことである。

おもてなし武将隊結成のきっかけは、二〇〇九年の「ふるさと雇用再生特別交付金事業」である。これは国による緊急雇用創出事業であり、事業費の二分の一を失業者の賃金とし、その後、民間企業に事業を移行するというものであった。名古屋市ではこれを機に観光に取り組みしたいという意図も

あったため、名古屋おもてなし武将隊というアイディアの下、助成金を受け入れることにしたとのことである。吉田氏はこの過程でもてなし武将隊のアイディアや企画に携わった。そして二〇〇九年一月三日、ほぼ一か月の準備期間を経て、名古屋おもてなし武将隊はデビューした。武将隊のメンバーの中には役者経験者もいたが、全くの素人もいたため、デビューに向けて必死に練習したことである。例えば武将隊のメンバーが身に着ける甲冑は一つ一〇〜二〇キログラムあるが、それを着てダンスの練習をしたりした。実際にはどうなるか分からなかったが、デビューの日には地元テレビ局も取材に訪れ、観客の反応も良かったため、これならばなんとかなるのではないかという手ごたえがあったとのことである。当初はスタッフ四名、役者が一〇名の総勢一四名であった。

だがいきなり順風満帆というわけではなかった。ほぼ素人が約一か月の準備だけで名古屋城という観光地に放り出されるわけである。また武将という設定があるため、たとえ観光客相手にもへりくだるわけにはいかないのだが、ついつい敬語で話してしまう武将隊のメンバーもいた。このような経験をを経て、武将隊のメンバーは試行錯誤しながら成長し、同時にお客さんも武将隊という存在に慣れていった。武将隊のファンも増え、ファン同士が仲良くなるという「城友」という現象も見られたとのことである。

二〇一〇年になると名古屋おもてなし武将隊は全国のメディアで取り上げられるようになり、次第に認知度も高まっていった。だが「ふるさと雇用再生特別交付金事業」の規定上、三年後には事業を民間に受け渡す必要があった。そのため武将隊結成後、すぐに収益をどうするかが課題となった。名古屋市という行政に属していた武将隊結成当初は、いわば助走期間のようなものであり、収益を上げるためにCDデビューや舞台公演等をしていった。だが吉田氏は、武将隊を通じて収益を上げるだけではなく、名古屋という地域の観光にいかにも貢献できるかということを考えていた。そのため、地場産業や食、観光関連のポスターでの武将隊の起用や、名古屋めし博覧会への参加等、多様な活動を実施し、試行錯誤を続けながらも行政や民間などとネットワークを形成していった。

二〇一二年からは武将隊は名古屋市から民間企業に移行し、市は一部の業務のみを担当するようになった。民間に所属することで武将隊は安定的に活動できるようになった。だが民間では活動に優先順位があるため、それまで吉田氏が重視してきた武将隊の名古屋という地域の観光への貢献活動は、以前と比較するとどうしても希薄になってしまったとのことである。いずれにせよ名古屋おもてなし武将隊は成功したといえるが、吉田氏は成功の要因の一つとして武将隊のメンバーに恵まれたことを挙げていた。武将隊の初代の織田信長役の方がリーダーシップを發揮し、武将隊全体のモチベーションを上げていた。また時流に乗ったのも成功要因の一つではないかと吉田氏は述べた。吉田氏は女子旅という言葉はあるが、男子旅という言葉がないように、観光に出かけるのは圧倒的に女子が多いため、女性をターゲットとした武将隊というアイディアが受け入れられたことや、失業していた若い人たちが、武将隊という自分の居場所ややりがいを見つけたこと、さらにも多くのメディアが取り上げたことも成功の要因であったことを指摘した。

このような名古屋おもてなし武将隊の経緯を振り返ってみると、名古屋の武将観光に取り進む場合、冷静に考えると愛知県出身の武将は意外と少ないことや、例えば桶狭間のような戦国期の歴史資源が少ない、あるいは可視化されていないことを痛感するようになったと吉田氏は述べた。そのため名古屋で歴史に関する観光を行う場合は、人を資源とし、それを可視化する必要があると認識するようになった。

だが同時に、吉田氏はキャラクター・ツーリズムの限界にも言及した。キャラクター・ツーリズムは地域の資源を可視化するし、人間は移動できるためプロモーション活動もイベントの開催も容易である。だがキャラクター・ツーリズムはターゲットが限定されるため、ある特定の人々にしか広がらない。しかし熱心なファンだけを対象とすると、名古屋という地域の他の観光に接続することができない。これは一般に着地型ツーリズムと呼ばれる、観光客受け入れ側が主導となる観光形態が持つ問題と共通する点であると吉田氏は指摘した。

名古屋おもてなし武将隊は全国的に情報を発信することにもなり、

成功を取めたといえる。だが吉田氏は、名古屋そのものは何も変わらなかったのではないかという疑問を提起した。その一方で、観光関係の仕事が続ける中で、吉田氏は名古屋が持つ様々な資源に気づき、観光街づくりというキーワードに興味を持つようになった。吉田氏は名古屋おもてなし武将隊の担当後、文化行政関係の業務に携わるようになった。この業務を担当するようになって驚いたことは、それまで自身が携わってきた「観光」と、新たに取り組む「文化」とが重なっていることであった。文化芸術には様々な波及効果があり、国内外各地で文化や芸術を観光に活かす活動が行われている。実は名古屋も芸術や文化に関してはかなり先進的な地域であり、デザイン都市としてユネスコのクリエイティブ・シティズ・ネットワークに参加している。また国内でも文化芸術基本法が改正され、その中にも観光という言葉が使用されている。文化財を活用した観光や、クールジャパンのような文化資源を活かす観光もある。

そのような過程を経て、吉田氏は現在、やっとかめ文化祭の企画や運営に携わっている。やっとかめ文化祭も観光街づくりの一環で

あり、地域をどう活かすか、という問題意識に立脚しているとのことである。改めて名古屋を見てみると、現在の名古屋城の城下町は四〇〇年の歴史を持つが、熱田神宮はもっと古い歴史がある。それらを地道に調べて行き、皆で楽しみ、それを将来に手渡す。やっとかめ文化祭にはこのような目的がある。

やっとかめ文化祭は毎年一〇月末に約三週間にわたり開催され、一五〇程度のプログラムが存在する。従来は行政が主体となるイベントは外部委託することが多かった。この方法は民間のノウハウを利用できるという長所もあるが、一回行くとそれだけで終わってしまう、外部とのつながりが築きにくいという欠点もある。だが、やっとかめ文化祭のプログラムは手作りであり、参加者はのべ一〇〇〇人を超える。町中の寺社や商店、大学生から七〇代の人々まで多様である。そのため現場でこれらの人々が出会い、つながることが可能になると吉田氏は指摘する。また街の様々な場所で、生活から歴史を学ぶことが可能になる。街は多様であり、色々なことをしている人が数多くいるため、必ずしも典型的な観光にならないかもしれ

ないが、別にメジャーな観光でなくてもいいのではないかと、このことであった。

そして吉田氏は武将隊にせよ、やっとかめ文化祭にせよ、いずれも人が演出している地域の観光である、という意見を述べた。そしてそこで重要なのが、地域と行政、企業など、様々な組織や主体の間をつなぐことであり、異なる領域を飛び越える行動力こそが必要とされるのではないかと指摘した。例えば名古屋では、観光は文化と経済をつなぐという役割もある。いきなりマスツーリズムは無理だが、豊かな日常に基づくバラエティに富む、クリエイティブはツーリズムが生まれるのではないかと、この問題提起を行った。

商店街拠点のご当地アイドルが県公認アイドルになるまで

株式会社サンスマイル代表取締役・エンターテイメントオフィス代表・名古屋みりよく日本一の会代表

奥田晋一

二人目の講師である奥田晋一氏には、「商店街拠点のご当地アイドルが県公認アイドルになるま

で」というテーマで、地域密着型のご当地アイドルであるOS☆Uの活動やそれに伴う地域活性化についてお話しいただいた。

奥田氏は元々あるホテルの総支配人として働いていたが、二〇〇八年にドニエコ切符の存在を知り、便利な切符であるにもかかわらず広告方法が効率的でない上に、駅長室でしか購入できないという欠点があることに注目した。そのため名古屋市交通局の担当者と連絡し、ドニエコ切符をホテルで販売することを提案した。この提案はなかなか受け入れられなかったが、奥田氏は熱心に提案し続け、とりあえず一か月だけホテルでドニエコ切符を販売することになった。その結果、ゴールデンウィークに販売したこともあり、通常の三倍のドニエコ切符を販売した。これは名古屋市交通局にとっても、ホテルにとってもドニエコ切符利用者にとってもwin-winの関係であり、名古屋に対して地域貢献の一つの形であった。

つなげる、ということである。奥田氏が特に強調したのが、たとえ相互につなげるのが困難に見えても、さまざまな視点やアイデアを駆使することにより、共通項を探し出すことは可能であることであり、それにより発信力が増加することであった。

奥田氏はその後独立して活動するようになったが、この際に奥田氏が目的としたのが地域活性化である。そしてその時期にご当地アイドルOS☆Uを立ち上げた方と出会い、OS☆U関連の仕事をするようになった。奥田氏が独立した時期はちょうどSKE48やチームしゃちほこが出てきた時期であった。だが多くのアイドルが東京を中心に活動するメジャー志向だったため、奥田氏は地域活性化を目指すという目標に従い、それらとは差別化した路線を選択した。例えば営業面では単発のイベントをするのではなく、なるべく「肩書」をもらえるような仕事を探したとのことである。例えば、OS☆Uはあおなみ線のプロモーション活動の一環として、「あおなみ戦隊24」という活動をした。これは新聞でも取り上げられた。もしOS☆Uが解散したとしても、あおな

み戦隊は残る。このように「肩書」がつくと新聞記事にもなりやすく、情報も発信でき、またたとえ奥田氏が抜けても活動を続けることができるため、意図的に「肩書」がつく仕事を探した。

またこれ以外に奥田氏が重視したのがチームのアイデンティティである。OS☆Uが活動する場合は、必ず名古屋、大須を強調し、自己紹介の際も、大須から元気を発信する、と述べることにしている。またOS☆Uが参加するイベントでも司会者には名古屋、大須という言葉を使用することを求めることにより、絶えず名古屋、大須の情報発信を心がけている。OS☆Uの活動拠点は必須であるが、結成当初は毎週水曜日に大須商店街の中ふれあい広場で無料ライブをしたとのことである。同じ時間に同じ場所で活動を繰り返すことにより、そこに行けばOS☆Uがいるということになり、リピーターも増える。ライブハウスではそうはいかないが、ストリートライブだと家族連れが無料で見に来ることも可能である。また水曜日は大須商店街の定休日であり、そもそも大須自体のお客さんが少ない。だがあえて水曜日にライブを行うことにより、商店

街目当てではなく、OS☆U目当てのお客さんを集めるということも目指した。

奥田氏がこのようなことをしたのは、大須でOS☆Uの活動の場所を貸してくれた方々に恩返しをしたいという意図もあった。そのため奥田氏はOS☆Uとともに大須商店街の秋の大道芸や夏祭り、秋祭り等の地域の活動に積極的に参加した。またそれらを中京テレビが報道することにより、大須商店街の宣伝にもなる。その結果、大須商店街とOS☆Uとの活動が大須の文化になっていった。また商店街での会議に奥田氏とマネージャーが参加する際にOS☆Uのメンバーを同行させると、打ち合わせの雰囲気がよくなることが多かった。地域の活性化やモノづくりでは人の活性化も重要であり、OS☆Uが参加することで会議に参加する人自体も増え、それにより様々なアイデアも出てくるようになったとのことであった。

さらに奥田氏はサービスとホスピタリティについても言及した。サービスは万人に対して行うが、ホスピタリティは個々の顧客への対応である。奥田氏は大須商店街におけるOS☆Uのホスピ

タリテイを重視し、メンバーにホテル業界の接客技術を積極的に教えた。例えば「ほめがえし」という接客技術があるが、OS☆Uもそれを利用することにより、好感度を上げることができる。またファンの目線を理解することも重要である。例えば、ライブの際には、あえてステージから降り、自分たちがパフォーマンズする予定のステージを見てみることで、自分たちがファンの目線からどのように見られているのか、もし半歩前に出ると照明がもっと効果的になるのではないか、などを確認する、とのことであった。さらに、ご当地アイドルに関しては一般からの要求がそれほど高くないが、奥田氏はあえてそのギャップを利用して。例えばOS☆Uのメンバーに、あるイベントに参加する場合はそのイベントに関連する情報を勉強しておくように伝える。そうすることで、さほど期待されていないご当地アイドルにギャップを生み出すことができる。このようなOS☆Uの活動について、奥田氏はパーソナル・アイデンティティの重要性を指摘し、具体的なキーワードとして、「つながり」、「とんがり」（唯一無二）、「つよがり」（強すぎない

負けん気）の三つを挙げた。これらのOS☆Uの活動の紹介を踏まえ、奥田氏は地域貢献という考え方についても言及した。この目的のために、OS☆Uでも常に最終的なイメージを描いた上で様々な活動の仕掛けを行ったとのことである。例えばOS☆Uの発信力が高まると、それにもない他の人々からの期待も高まる。OS☆Uが献血大使の仕事をした際には、一五人のメンバーにはそれぞれ三〇〇〇から一〇〇〇〇人のツイッターのフォローがいるため、一五人がつぶやけば三〇〇〇人×一五人に献血という情報が伝わることになる。このような事実を伝えることで行政関係の仕事を引き受けるようにもなった。また新聞等のマスメディア、特に地方紙で取り上げられることにより、愛知県内の行政関係者の間でも知名度が高くなる。

ここで奥田氏は納税というキーワードについても言及した。例えば名古屋で活動しているアイドルでも、事務所が東京にある場合、活動による収入に伴う税金は東京に入ることになる。しかしOS☆Uの活動による収入の税金は名古屋市に行くことになる。またOS☆U関連のグッズの製作は名古屋市内の業者に頼むため、地域活性化にもつながる。OS☆Uに仕事を依頼することで地域活性化につながり、さらに行政関係の仕事や活動も増えるという循環が生じることについて奥田氏は言及した。このような活動を続けてゆく中で、OS☆Uは愛知県公認の唯一のご当地アイドルになった。

最後に奥田氏は、地域活性化全体から見ると、外部からの力では持続可能な地域活性化は困難であるという問題提起を行った。OS☆Uが全く関わりのないところで持続可能性があるとしたら、何かの応援隊になるしかない。そのためは一度そこに出向き、関係者と相談することで、その住民を活性化する必要がある。それがOS☆Uの活動で学んだことである、とのことであった。

（文責：市川哲）

▼第七回

「地域づくり」セミナー

セネガルで考え、名古屋でやってみたこと―触媒としてのよそ者―

フリーランス・ファシリテーター
本学人間文化研究科研究員
稲葉久之

第一部では、青年海外協力隊として二年間活動を行ったセネガルの経験を経て、現在、日本のまちづくりに関わる中で考えた「よそ者の所作」について話題提供者より発表を行った。「教師と生徒が対等な立場に立ち、対話を通して課題に対する理解を深める」パウロ・フレイレの課題提起型教育の思想、「現地住民の日常に援助者が参加し、住民の主體的な学びと行動を促す外部者の役割」を説いたロバート・チェンバースの思想を大学で学び、青年海外協力隊（村落開発普及員・現・コミュニティ開発）としてセネガル共和国に赴いた。

◆セネガルでの経験

セネガルでは、フレイレやチェンバースの考えに従い「対話を重視する」「自分自身が住民の日常に参加する意識」を持って、活動をスタートさせた。村内の全戸訪問を行うことを徹底し、村人との関係づくりを続けることで、三か月目頃から次第に村人から声をかけてくるようになり、相談や提案

をするようになってきた。「トマトの葉に虫がついているのだけども、どうしたら良いだろうか?」「どうやら自然農薬をつくることができるようだけど、作ってみる?」「やってみよう」そんな感じで、日常の小さなつぶやきや疑問から活動のタネをみつけ、染色や灰石鹸・改良かまどづくり、ビーズアクセサリーによる収入向上活動などを展開していった。

セネガルでの活動を経て、①自分の聴きたいことだけではなく、村人が話したいことを話せる関係・環境をつくること、②思い込みを持たずに、素朴な日常の疑問をなげかけること、③聴くことだけではなく、村人の人間関係や生活風景を注意深く観察し、みる・きく・感じることを通して、焦らず状況把握に努めること、の大切さを感じた。その結果、①活動のきっかけとなるタネが自然と集まってくる、②村人自身が自分たちの日常への関心・疑問を持つようになる、③関係性にも配慮できるようになる、効果が得られた。同時にコミュニケーションの量が増えることで、信頼関係を構築することにもつながり、より住民の暮らしの中に溶け込んでいくことが出来たのではないかと考えた。

◆名古屋での経験

セネガルで活動を行う中で、日本国内における地域課題の取り組み方、まちづくりや地域おこしの現状について関心を持つようになった。「日本には地域課題を相談し、解決のために協力してくれる人材や制度はあるのだろうか?」これが地域づくりに関わるようになったきっかけだった。

名古屋港水族館がある名古屋市港区西築地学区。このエリアを中心とした港まちエリアで活動する「港まちづくり協議会」。話題提供者は、ここに計四年ほど事務局員として活動を行った。この経験から、①地域コミュニティの連携の強さと担い手不足の深刻さ、②内外の人をつなぐプラットフォームとしての役割、③アーティスト(外部者)の視点からみえる町の姿を共有する大切さ、を感じた。また「よそ者が手を出すことの弊害」についても考えるきっかけとなった。住民が長く続けてきた活動を、一度でも辞めてしまうと取り戻すことは難しい。住民のニーズに応え手を出すことは簡単だが、手を放す責任も十分に考慮し、「何をすべきか、何をしたいか?」を考へる必要がある。いづれにしろ「課題も未来も、そこ

に暮らす住民のもの」であり、住民自身が地域の過去と現在、未来を描いていくことが大前提であることをまちづくりの現場から学んだ。

◆設楽町での取り組み

地方創生の取り組みを通して「地域に住む女性の縦(世代間)や横(地域間)のつながりを深める機会が欲しい」という声を多く聞いた。そこで平成二七年度に「Make Mama's Jobs」という交流イベントを実施し、平成二九年度には「縁結びワークショップ」を開催した。参加者が「私が出来ること」「私がやりたいこと」を書き出し、参加者同士で意見やアイデア交換をするお見合いパーティのようなワークショップだった。ワークショップを通じて「出来ること」と「やりたいこと」のマッチングが成立したグループは、既に小さな動きを始めている。きっかけさえあれば、想いのある人は必ず動き出す。よそ者は人をつなぎ、一歩踏み出すためのきっかけを提供すれば良い。そう強く実感する取り組みである。

◆触媒としてのよそ者

敷田(二〇〇五)は地域づくり・

まちづくりに関わるよそ者の効果として①地域にない知識や技能を持ち込む、②よそ者による地域の「励起」する効果、③地域住民の持つローカル・ナレッジを表面させるのを助ける、④地域側に気づきをもたらす、地域自体の変容を促す、⑤地域とのしがらみのない立場から提案が出来る、などの効果を指摘している。こうした効果を発揮する「よそ者」は何をし、何をしたいか?。これまでの議論から①焦らず関心を持って、住民の声に耳を傾け、ぶらぶらと地域を歩く、②地域は重層的な人間関係の上に成り立っているので、役職のある人やない人、世代、性別の多様性に配慮し、より多くの人から情報を集める、③地域の課題や未来は住民のものであるということに自覚し、「よそ者」としてどこまで手を出すのか、何ができるか、を常に自問しながら関わる、④焦らず勝手に判断しない。「よそ者」に出来ることは、「よそ者の活動」を行うことではなく、そこで暮らす住民の声を集め、人をつなぎ、きっかけを提供する支援者に徹することだと考える。

【参考文献】

敷田麻美「よそ者と協働する地域づく

りの可能性に関する研究』『江淳の久爾』
五〇、七四一八五、二〇〇五

パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』
垂紀書房、一九七九

ロバート・チェンバース『参加型開発
と国際協力』明石書店、二〇〇〇

「よそ者の「限界」、覚悟ある住民
として」アフリカ・福島 経て信
州」

長野県小川村地域おこし協力隊員
中村 雄弥

本発表では、まず、これまで国
内外の地域社会に「よそ者」とし
て関わってきた提供者自身の経験
をベースに、「よそ者」のもたら
す効用と弊害を整理した。その上
で、「よそ者」で居続けることに
限界を感じた自身が、さまざまな
葛藤を経て、個人的な結論として、
「よそ者↓住民」への移行を選ん
だ経緯を一人称的な観点から紹
介した。発表後半では、「住民に
なることのリスク」を踏まえた上
「地域内よそ者」及び「地域外よ
そ者」がどのように振る舞うべき
か、個人的な考えをまとめ、第二
部の議論の端緒とした。

◆異国から来た「よそ者」として
二〇〇七〜二〇〇九年、アフリ
カ・マラウイ国にJICA青年海
外協力隊のエイズ対策隊員として
派遣された。

HIV/AIDS感染率が約
一六%という同国にて、「エイズ
が社会に与えるインパクトを軽減
し、住民の「行動変容」を促す」
というのが隊員としてのミッション
だった。しかし、二年間の活動
終了後、「何もできなかった」と
無力感に苛まれた。新しい技術を
外部から導入するなど、よそ者の
効用も多少はあったが、現地の実
情／文化を深く理解しないまま実
施した活動は、持続性に乏しく、
インパクトも心許ない。何より「二
年で帰る」という大前提がある限
り、所詮はお客さんであり、エイ
ズの脅威をどこまで「自分事」と
して捉えられたか、自信も無かつ
た。期間限定の「よそ者」の存在
意義とは何か？答えが見えなく
なった。

◆国内援助における「よそ者」と
して

マラウイから戻ったあと、
二〇一一年以降、東日本大震災の
復興支援に携わった。気仙沼大島
と福島という二つの場所で、国内

援助における「よそ者」として、
地域に関わる機会を得た。

気仙沼大島においては災害対策
本部にて、現地住民とともにボラ
ンティアリーダーを務めたが、そ
の際、外部からやってくる支援団
体や学術団体による一方的な物
の支援やお仕着せの復興ワーク
ショップなどが現地にとって「は
た迷惑」な存在となっている現実
を垣間見た。

福島では、子どもの権利擁護を
旗印としている国際NGO職員と
して現地に入った。避難所や被災
地で軽視されがちな「子どもの権
利」を前面に出した活動、という
外部者ならではの強みを発揮する
場面もあったが、全体として見る
と「現地の文脈を無視した、価値
観の押し付け（企業論理およびグ
ローバル基準）」「持続性を無視し
た局所集中的な資本投下」といつ
た否定的側面も多かった。最も象
徴的だったのは、復興途上の福島
にありながら、団体側の一方的な
事情で、被災地から五年で撤退し
てしまったこと。現地のNPO関
係者からは「数年でいなくなる人
間に好き勝手かき回されては困る。
余計な口出しはしてほしくない」
と強く非難された。「いつか居な
くなる」存在としての「よそ者」

にとり、結局、復興支援も「他人
事」だったのではないか。

◆よそ者の限界、越えるべき壁

上記のような経験を経て、個人
的に、「よそ者」の限界を強く感
じるようになった。「斬新なアイ
デア」「しがらみのない自由な立
場」など「よそ者」の「強み」も
あるが、「いつか居なくなる」
ことが大前提となるがゆえ、現地
の「文脈（context）」から乖離
したり、住民の「主体性、自己決
定（ownership）」を軽視したりし
て、信頼を得られず、結果的にも
たらす益より害が多かったりする。
テクニカルな議論の前段階（かつ
必須条件）として、この部分が決
定的に重要ではないか、と考える
ようになった。

「よそ者」が信頼を得るには何
が必要か。筆者は、「覚悟」（リス
クの引き受け、運命共同体の意識
共有）と「正当性」（固有文脈の
理解、参加型の意思決定）がキー
ではないかと考える。そこでは、
「誠意」を見せつつ、地道に「実
践」を重ねることが不可欠である。
外部に在る「よそ者」が、二つの
要素を獲得するのは容易ではない。
早道は、覚悟を決めて、その地域
の住民となることではないか。そ

のような思考を経て、筆者は長野県小川村へ定住することを決め、二〇一六年より移り住んだ。現在は村の生活を「自分事」として捉え、「いかに（自分を含む）皆の生活を良くするか」という観点で判断し、日々行動している。

◆私的「よそ者」の作法

以上のように、さまざまな葛藤を経て、「よそ者」から「住民」となった筆者であるが、住民になると地域社会との距離が近くなる反面、「よそ者効果」が低減する恐れがある。地域内に軸足を置きながら、「よそ者」の強みを生かすには、「よそ者」的視点を維持するための工夫や努力が必要である。具体的には、▽Uターン者&Iターン者のネットワーク構築▽地域外専門家とのパイプ作り▽地域内に外部とつながる「非日常空間」設置―といった地域内外をつなぐ「窓」としての役割を果たしていくことが大切であろう。一方、地域に定住しない「よそ者」には、「他人事」を「自分事」に近づけるため、以下のようなことを期待したい。▽「覚悟」「正当性」を得るための継続的な努力▽継続訪問&フォローアップで「自分事」化▽参加型アプローチの採

用（地元民の巻き込み、自己決定の尊重）等。

本発表では、自身の経験を振り返り、心模様を辿りながら、「よそ者」の在り方について考えをまとめた。あくまで主観的な思考であり、別の「よそ者」の在り方を否定するわけではない。実際、一口に「よそ者」といってもスタンスは幅広く、地域と関わる度合いの濃淡は多様である。それぞれに異なる役割があり、その多様なアクターによる相互作用こそ、地域活性化には不可欠である。末尾にその点を付記して、本論を閉じる。

【参考文献】

敷田麻美「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」『江渟の久爾』五〇、七四―八五、二〇〇五